

～ドナウ河～

ドイツ南東部・パッサウ市街地を航く

リバー・カウンテス(リバー・ダッチェス同型船)



(写真提供:オーシャンドリーム社)

ライン、マイン、ドナウ河
リバークルーズの魅力

リバークルーズの最大の魅力は、セーリング中でも常に両岸に景色が見えることで地元の生活が垣間見れるところではないでしょうか。移り行く景色からは、その国の経済の基盤が工業なのか農業なのか分かってしまうほど。ドナウの下流はルーマニア・ブルガリア。川幅も広く広大な土地には沢山の作物が栽培されており、のんびりとした時間が流れています。周囲に高層ビルはもちろん高い山脈もないため、川に沈む夕日はとてもロマンチックに見えます。セルビアやクロアチアへ進むと、国立公園に指定されているほど自然ゆたかで、絶壁に囲まれたドナウは、ここを行き交う沢山の民族がこの同じ景色を眺めていたのかと想像を巡らせることができます。旧ユーゴスラビアの国はなかなか日本とは縁遠いところであり、暗い戦争の爪痕ばかりが目立ちますが、船主催のツアーでは、そこに生活する人々と触れあう事もできます。船内で行われる地元の子供たちや楽団による、フォルクローレや音楽演奏はもちろん、家庭訪問して家庭料理を頂いたりもできます。

ハンガリーまで進むとハブスブルクと、オスマントルコの二つの大帝国の影響が垣間見る事も出来ます。ドナウの真珠ブダペストの町の美しさは昼も夜も絶景。スロバキアを通り、オーストリアへ入ると古城や修道院、教会を中心とした小さな町が川に沿って点在しこれまでの景色と変わっていきます。さらにドイツへ進むと、日照時間も長くなり、私達が夕食を楽しんでいる間も、行く先々でサイクリングや日光浴、川遊びをする地元の人と手を振り合いすれ違っていく。食後の夕暮れ時間は、デッキへ上がりのんびり外の景色を眺めるのがおすすめです。

大河ドナウから、ドナウ・マイン運河へ、マイン川、ライン川と進路を変えるとアドウ畑に古城の風光明媚なライン川中流へ。その後大都会フランクフルト、ルー工業地帯を通りオランダはアムステルダム、北海へ。

この旅の良さは移り行く美しい景色だけではなくリバーダッチェスと共に旅をする事でもあります。浮かぶブティックホテルと称される船内の装飾は落ち着いた白と薄い青が基調で、心を落ち着かせてくれます。そして何よりも、約22日間毎日顔を合わせるクルーが迎えてくれ、たまには冗談を交えながら、名前を呼び合い笑顔で挨拶を交わす。英語が出来るとできないは関係なく、笑顔の挨拶が一番のコミュニケーションで、バーテンダーやウェイターは、いつものお気に入りの飲み物をずっと出してくれたりします。こんな料理が恋しいと相談してみたら慣れない日本食を作ってくれたり、細かい要望にも丁寧に答えてくれるハウスキーパー達。今日は何してた? と気さくに声を掛けてくれる他の外国人乗船客。小さな疑問も、冗談交えて熱心に答えてくれるキャプテン。初めて会ったばかりなのに、この船に乗っているすべての人が狭い廊下をニコニコしながらすれ違っていくこの雰囲気なんとも言えない居心地の良さを醸し出しています。大きな家族のように、一人一人の距離が近いのもリバーダッチェスで旅する最大の魅力だと言えます。客室はどうしても狭いですし、船の設備は小さなジムとコーヒーマシンと、ラウンジにレストランひとつ。後は、移り行く景色を独り占めできるデッキのみです。しかし、この船で作っていただけと思えば、他の船とは比べ物にならないほど、大きくてかけがえの無いものになるに違いありません。

〈富澤知香／同クルーズ3年連続添乗〉

(※2017年7月リバーダッチェス東西ヨーロッパ大横断クルーズを実施、詳しくは本誌15ページを参照ください。)